



BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 7 号

平成 26 年 10 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079（直通）

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

「さざえ堂」に集うひとびと

大正大学表現学部表現文化学科 教授
西蔭 浩子

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：さざえ堂だより
- 3 頁：研究ノート
- 4 頁：BSR 図書室・今後の予定

私が所属している表現学部の研究室は 3 号館にあり、さざえ堂と隣接しています。おかげで、朝な夕なにさざえ堂をいろいろな角度からながめるチャンスに恵まれ、そこに集う人たちの姿を目にすることも多くなりました。

お昼時にはかご台車に乗せられた近所の保育所の子どもたちが、保育士さんに連れられてやってきて、しばらくキャンパスで遊んでいる様子が可愛らしく、しばし見とれてしまいます。夕刻近くには、南門にある休憩所で一休みしているビジネスマン、1 階のロビーのソファーでのんびりと時を過ごしている人たちなど、昨年 5 月にさざえ堂ができて、南門を開放するようになっ

てからキャンパスを行きかう人たちが変わってきたと感じます。

学生たちと教職員に限られていた大学が、地域の人たちに開かれた大学として大きな一歩を踏み出したことを日々の生活の中に見てとることができます。

こうした変化は、キャンパスの中に限ったことではありません。今まで大学の建物が話題になることはあまりありませんでしたが、最近は外部の方から「大正大学にさざえ堂ができたんですね」と声をかけられたり、「外の人でも登れるんですか」と尋ねられることが多くなりました。都営三田線内での車内アナウンスやテレビや新聞に取り

上げられた影響からか、中には、わざわざさざえ堂まで足を運んで、お参りする人もいて、さざえ堂への一般の人たちの興味・関心が想像以上に高いことを実感します。キャンパス整備で校舎が建て替えられ、ランドスケープ（舗装）も進み、キャンパスの真ん中にスペースができたこともキャンパスに人が集まってくる大きな要因となっています。

地域の人びとがキャンパス内にいることによる学生への良い影響を期待しつつ、「さざえ堂」の存在が大学全体にどっしりとした重厚さを与えてくれていることを日々発見しています。

さざえ堂だより

菊まつり、来月開催！

11月6日（木）から14日（金）にかけて、第22回「すがも中山道菊まつり」が開催されます。今年も、昨年に引き続き、大正大学が会場となります。

一昨年までは江戸六地藏尊・眞性寺、とげぬき地藏尊・高岩寺がメイン会場でしたが、さざえ堂落慶を機に、大正大学もメイン会場の仲間入りを果たしました。

昨年は眞性寺、高岩寺、猿田彦大神、大正大学の4か所をめぐるスタンプラリーが企画され、スタンプを集めた方の抽選会場が大正大学となったこともあり、大変多くの方にお越しい

ただきました。

近郊各地の菊作り愛好家の方々が丹精込めて育てた大輪の菊が、華やかに巣鴨を彩るこのお祭り。さざえ堂前広場と庚申塚通りに面した南門広場にも見事な菊がところせましと並び、みなさんの目を楽しませてくれるでしょう。

また、今年は本学の埼玉キャンパスがある松伏町で、現地の農家の方々の指導を受けながら、鴨台スタッフが菊の栽培をしてきました。その菊の花を南門広場からさざえ堂までの道になるように配置をする予定ですので、そちらもお楽しみください。

地域交流・地域発展の願いを込められて建立されたさざえ堂に相応しい「すがも中山道菊まつり」。多くのご来場をお待ちしております。（〇）



さざえ堂参拝に心のお土産を

9月8日、さざえ堂に北桜会という団体のお参りがありました。北桜会は北区で視覚障がい者のガイドヘルプボランティアを行っている団体。今回は19名でお参りになり、その約半数が視覚障がいの方でした。

視覚障がいのみなさんは、当たり前ですが、さざえ堂の観音様をご覧になれません。そこで、仏様に触れていただく体験をしていただくことになりました。もちろん、鴨台観音様に触れていただくわけにはいきませんので、触れても大丈夫な仏様（小柄な仏像）をご用意しました。

みなさん、「これが宝冠をかぶった頭」、「これが印を結んだ指」と珍しそうに、そして、楽しそうに触れていらっしや、喜んでくださいました。

実は、こうした経験をしていただけたのは、お堂番さんの仏様への想いとながりがあってこそでした。

事前に北桜会の方が下見にいらっ



しゃって、お堂番さんに団体参拝の旨を伝えられました。そして、お堂番さんのみなさんと、さざえ堂を昇り降りするだけでなく、何か仏様に触れていただける体験をしてもらえないかと考え、仏像を彫る講座を受けられているお堂番さんが3体の作品を集めてくださったのです。

ただお参りしていただくのではなく、プラスチックの心のお土産を持って帰って欲しい。そのような気持ちで、日ごろから、まごころこめたご案内をいただいているお堂番さんに、感謝の念をあらたにした次第です。（〇）

研究ノート

臨床宗教師の可能性⑤

—臨床とは？—

臨床宗教師、臨床仏教師の紹介をしてきましたが、果たして「臨床」とはどのような意味を持つのでしょうか。

「臨床」を辞書で引くと、次のような説明が出てきます。

「病床に臨んで実地に患者の診療にあたること。」(『大辞泉』)

「病床に臨むこと。」(『広辞苑』)

「①医者が実際に病人の診察や治療をすること。②病人が寝ているところへ行くこと。」(『ベネッセ表現読解国語辞典』)

医療に関わる言葉であることが分かります。今までに紹介した臨床宗教師、スピリチュアルケア師は、たしかに医療・看護の場での活動を想定していますから、そこで意図される「臨床」は辞書に準じたものと言えるでしょう。

他方、臨床仏教師は前号で少し触れたように病床に限らない、広い領域を思考しているようです。

今回は、10月15日から開始される第二期臨床仏教師養成プログラムの内、座学プログラムの内容から、僧侶にとっての「臨床」を考察していきたいと思えます。

臨床仏教師講座の内容

全 10 講からなる座学プログラムをまず紹介しましょう。

①日本人の死生観—臨床仏教入門

②こころを聴く

—「カフェ・デ・モンク」の活動

③旅のおわりに

—医療者が語るターミナルケア

④若者のこころの奥に潜むもの

—問題行動とその背景を探る

⑤安心して悩める社会を

—仏教者の自死抑止ネットワーク

⑥現代版・てらこや教育の実践

—お寺と地域の協働の可能性

⑦生きるってなんだろう？

—若者の悩みに寄り添う仏教

⑧「宗教なき時代」に

—過疎化・孤立化に向き合う

⑨仏教チャプレンの役割

—生老病死の現場に関わる仏教者

⑩現代社会における臨床仏教師の使命

①と⑩は概説的な内容となっており、

②から⑨において個別具体的な実践

例が語られます。②は被災地の仮設

住宅における移動傾聴活動、③は仏

教ホスピスでの看取り、④は若者のひ

きこもりやカルトへの入信、⑤は自殺予

防・自死遺族支援、⑥は不登校・いじ

めなどの教育問題、⑦は若者の孤立・

孤独、⑧は過疎化・孤立化、⑨は病

院・刑務所・老人ホームなどでのスピ

リチュアルケアとなっています。



応病与薬

本来の臨床の意味する病床（病院・老人ホーム）での活動のほか、「被災者」、「心に苦しみを抱えた若者」、「子ども（いじめ・不登校）」、「死にたいと考えている人」、「大切な人を失った人」、「過疎のコミュニティ」が活

動の対象例として挙げられています。

いずれも現代社会の「苦」の表出といえるものです。そうした社会の現状、資本主義やグローバル化する社会のなかで、置き去りにされ、苦しんでいる人々と相對して、仏教者としてなんらかのアクションを起こすことが臨床の活動といえます。

お釈迦様が相手の苦しみに応じて教えを説いたことを「応病与薬」と表現して医療になぞらえてきたことから、いたるところにある「苦」に對峙する仏教者の活動に「臨床」を当てはめるのは妥当な用法と思えます。

臨床は寺院の外？内？

一方で、臨床に関する議論が、寺院の外での活動に焦点が行きがちな点には注意が必要でしょう。

檀信徒の家庭に、ひきこもりの子がいるかもしれませんし、自殺を考えるほど悩んでいる人がいるかもしれません。とくに、大切な人を亡くした人へのケア（グリーフケア）は、僧侶がもっとも取り組みやすく、常に対峙する苦しみです。

ある宗教者は、「自分のお寺・教会の檀家や信徒から一人も自死者を出さない、ホームレスになる人を出さない、全国の宗教者がそう意識すれば、すごい社会貢献になる」と語りました。

檀信徒と法事や葬儀だけの付き合いであれば、抱えている苦しみに気づくことは難しいかもしれませんが、より深いコミュニケーションをとって、檀信徒の悩みに気づくことができる、いつでも和尚さんに相談をしてもよいのだと檀信徒に認識してもらえ、そのような寺院の内側での関係性作りも、臨床の活動といえるでしょう。(O)

BSR 図書室

高橋卓志『寺よ、変われ』

(岩波書店、2009 年、780 円 + 税)

「日本の寺は、いまや死にかけている。」

かなり辛辣な一文ですが、本書の著者は、松本市にある臨濟宗神宮寺のご住職です。第一線で活躍する僧侶が日本の仏教・寺院存続の危機感から発した言葉です。

著者は、一方でチェルノブイリ原発事故被爆者・タイ HIV／エイズ感染者・患者の支援、ターミナルケア、地域高齢者ケアなどの社会活動を積極的に行っています。それらの活動は、僧侶として「いのち」と向き合い、いのちを生きるうえで必ずまわりつてくる「苦」を持つ人々にどう寄り添い、緩和していくかという仏教の命題の延長線上にある活動であることを述べています。

本書第 1 章「寺は死にかけている」、2 章「なぜ仏教の危機なのか」では、寺院・仏教の置かれている現状を分析して危機を訴え、3 章「苦界放浪—いのちの現場へ」で、著者の生い立ちから、慰霊行で訪れたビアク島での体験が契機となり「苦」と真正面から向き合うことで、僧侶、寺のなすべきことが見えてきて今



の活動につながっていることを紹介しています。

4 章「寺よ、変われ」では、「〇〇では寺は変わらない」と現状の課題を示し、次いで「〇〇ならば寺は変わる」とキーワードを以って、変革の具体例を挙げています。そして最終章の 5 章で「葬儀が変われば、寺は変わる」として、著者が住職を務める神宮寺の葬儀を紹介しています。

お釈迦さまが説いた四諦、「苦」に寄り添う慈悲行という大命題が仏教の原点なのだと再認識し、改めて僧職にあるものの立ち位置を考えさせられる一冊です。(M)

今後の予定

10 月 25 日 (土)	11 時～12 時	花会式 (時宗)	鴨台観音堂前
	12 時～16 時	鴨台カフェ 僧話花	5 号館 1 階

※今月は第三土曜日が入試日のため第四土曜日になります。

11 月 9 日 (日)	11 時～12 時	菊まつり記念法要	鴨台観音堂前
--------------	-----------	----------	--------

11 月 15 日 (土)	11 時～12 時	花会式 (真言宗豊山派)	鴨台観音堂前
	12 時～16 時	鴨台カフェ 僧話花	5 号館 1 階

